

「ラマクリシュナの福音」勉強会 第24回 (2016年 3月8日)

・第24回の勉強範囲：「第一章 師と弟子」4頁

・□ (読む) 「師と弟子」 4頁最初～上段L8

シュリー・ラマクリシュナの部屋に戻る途中、二人は話し合った。シドゥはMに、この寺院はラーニー・ラスモニによって建立されたのであると話した。神はここでは毎日、カーリー、クリシュナ、およびシヴァとして礼拝されており、門内でおおぜいのサドゥたちや乞食たちに食物が与えられている、と彼は言った。彼らがふたたびシュリー・ラマクリシュナの部屋の戸口に着くと、扉は閉まっており、外にお手伝いのブリンデーが立っていた。イギリス風に訓練されていて許可なしに部屋に入ることをしないMは、「聖者はおられるのですか」と彼女にきいた。ブリンデーは、「はい、お部屋にいらっしゃいます」と答えた。

(解説)

「お坊さんはこの中におられますか？」

「聖者はおられますか」のより正解に近い翻訳は「お坊さんはこの中におられますか」です。

なぜなら日本でもそうですが、聖者とふつうのお坊さんではレベルが違います。Mさんはこのときまだ、シュリー・ラマクリシュナのレベルがどのくらいか分からなかった。聖者ほど高いレベルだとは思っていなかったので、「お坊さんはおられますか？」と聞きました。

「書物ですって？ おお、とんでもない！ 全部この方の口から出ます」

□ (読む) 4頁18行目～22行目

M 「いつごろからここに住んでいらっしゃるのですか」

ブリンデー 「おお、ずっと前からおられるのです」

M 「たくさんの書物を読んでいらっしゃるのですか」

ブリンデー 「書物ですって？ おお、とんでもない！ 全部このお方がお話になるのですよ」

アールババブイトイ!!! 書物ですって? おお、とんでもない!

このベンガル語を翻訳するのはとても難しいです。英語の翻訳は

Books!! Oh, Dear, No!!!

イギリス人だとこれがいいですね、Oh, Dear No, No, No!!!

①召使い布林デー

布林デーは古くからの召使いでしたから、コルカタからドッキネッショルに来られる様々なお客様を見てきました。学者やお金持ちや偉大な方は布林デーがその外見を見ただけで偉い人たちだと分かりました。その偉い方々が無学のお坊さんの部屋に入って、ただお坊さんの話を聞くだけ。自分たちは何もしゃべりません。本で勉強したとは思えないお坊さんが聖典のような話をいつもしています。お坊さんの口からは話、話、話。話は全部、お坊さんの口から出ています。しかしウパニシャッドもバガヴァッド・ギーターも何も勉強していません。

布林デーは霊的な人ではなく霊的なことに興味もなかった。ふつうの召使いでしたが、ずっとその坊さんのことを見てきた。そして彼女の答えは面白くて正しい。

「全部このお方がお話になるのですよ」

②ムケ=口 → 話

この『話』という言葉のベンガル語は ムケ=口 (くち) という意味です。ムケにはベンガル語で『顔』と『口』という二つの意味がありますが前後関係でこの場合は『口』です。ですので直訳すると

「全部そのお方の口から出ます」

となります。

それを聞いて Mさんは驚いたようです。

□ (読む) 4頁上段 23行目～下段 1行目

*M*は大学を卒業したばかりだった。シュリー・ラーマクリシュナが本を読まれないときいて驚いた。

(解説)

真理はすべて口の中にある

霊的になるためにラーマヤナ、マハーバーラタ、ウパニシャッド、バガヴァッド・ギーターなどの聖典の勉強が大事だというのが普通の人やお坊さんの考えです。Mさんも同じ考えでした。

普通のヒンドゥー教のお坊さんはウパニシャッド、バガヴァッド・ギーターなどの聖典の勉強をしています。仏教のお坊さんはお釈迦様の教えを絶対に勉強します。キリスト教でも牧師になるとイエス・キリストの教えをたくさん勉強します。だからMさんはこのお坊さん（サドゥー）もいっぱい勉強したと考えました。

しかしシュリー・ラーマクリシュナの真理の話は全部口の中にあり、口から出ています。常に真理のことを考えていたシュリー・ラーマクリシュナが真理のことを人に教えるときは、真理のことは聖典からではなく、口の中から出るのです。

本について

①二種類の本

ドヴェー ヴィッディエー ヴェーディタツヴィエー パラー チャ
エーヴァ アパラー チャ (ムンダカ ウパニシャッド)

There are two kinds of knowledge to be acquired.

The spiritual and the secular.

人が身につける知識には、霊的と世俗的、の二種類がある。

・協会の図書館の窓にはこのウパニシャッドの有名な言葉が飾られています。

本には2種類あります。パラーヴィッディヤの本とアパラーヴィッディヤの本
(☞2011年9月インド大使館ギーター勉強会)

パラヴィディア（靈的、永遠の知識）の本

たとえばヴェーダ、ウパニシャッド、聖書（バイブル）、お釈迦様の教え、などには全部真理のことが入っています。

アパラヴィディア（世俗的、一時的な知識）の本

ふつう人は、ものごとを知ったり、お金を稼ぐために勉強をしますね。常に最高の真理を考えているシュリー・ラーマクリシュナは、絶対の真理の見方からその種類の本はすべて無駄だと考えました。なぜならテーマが一時的だからです。

②どのように神を悟るかという方法が分かると聖典もいらない

シュリー・ラーマクリシュナにとっては靈的な知識のための本ですら、用がなくなるといらなくなります。それらの本についてのシュリー・ラーマクリシュナが使った例は

「故郷から『これとこれを買ってきてください』という手紙を受け取って、その内容を理解すると、手紙はすぐに捨ててしまった」です。（☞福音 P773 など）

どのように買い物をするか、その方法を教えてくれるのが聖典です。

どのように神様を悟るか、その方法だけを聖典から学んでください。

あとは実践をしてください。そのように考えると、聖典ですら世俗的です。なぜなら聖典の勉強だけでは悟らないからです。

それでときどきシュリー・ラーマクリシュナは、ドッキネッショルにきた有名な方から若い人までのさまざまな人に尋ねました。

「あなたは何の勉強をしたことがありますか？」

「どれくらい勉強しましたか？」

「何の試験にパスしましたか？」

大切なことなので、注意深く何度も確認しました。

そしてふつうの答えは

「本をたくさん勉強しました」

というものでした。

普通の大学での哲学など様々な本は、あまり意味がないので捨ててください。
あなたが霊的な実践をするために、あなたの人生で何が大事ですか？
どのようにして真理を悟りますか？ それを実践してください。

とてもとても大事な要点ですね。

悟りの前には、聖典はどのように悟るかを理解するためには必要ですが、理解した後はもういらぬ。悟った後には真理を理解しているので、聖典はいらぬ。
シュリー・ラーマクリシュナの状態は悟った後の状態です。
そしてブリンデーは言いました。

アールババブイトイ シャールバナ ムケ
「書物ですって？ とんでもない、すべてあのお方の口にあるのです」

皆さんベンガル語を勉強してください。そうするとこの言葉のニュアンスがよくわかります。

悟った人の状態

①悟った人の舌にはサラスワティーが坐っている

悟りますと、学問の神様、サラスワティーの恩寵で何でも知ることができます。悟った人の舌にサラスワティーは坐っています。坐って供給しています。シュリー・ラーマクリシュナはときどき「マザー・カーリーがすべてを供給しています」と言いました。マザー・カーリーはサラスワティーですから。もし悟りますと、サラスワティーのおかげで全部理解できます。パタンジャリのヨーガ・スートラもそうでしょ。悟った後に皆さんは全知になります。

②全知になる

どうして全知になりますか？

なぜなら、まず悟りの意味を考えてください。自分の魂を悟ります。自分の魂の本性は、サッチダーナンダ、絶対の真理でしょ。悟りますとその絶対の真理という魂の性質が自分の中に入ってきます。その感じで全知になるのです。

③100%神様にお任せをしている

ふつう、たとえばインド大使館のバガヴァッド・ギーターの講義の前にたくさん予習をします。だけではなく、メモを持って行って、そのメモを見ながら説明します。

しかしシュリー・ラーマクリシュナは何も準備しません。

ある時、コルカタのブラーフモー・サマージに行くときに、どのようなポイントを話そうか、またはどんな物語の例を使おうかと、ちょっと心で準備をしました。もちろん何もメモはしなくて。しかし向こうに行って全部忘れた。準備しても忘れます。しかし忘れたとき、全部マザーが供給してくれました。どこにでもマザーがいますから、どこに行ってもマザーが供給します。それが面白いです。

準備をするということは、神様に 100%お任せをしていないということですね。もっと深く考えてみてください。

シュリー・ラーマクリシュナはマザーに 100%お任せしています。

もし自分が準備すると、少しエゴが出ています、ね。それは 100%お任せはできていない状態です。シュリー・ラーマクリシュナは 100%マザーにお任せをしていたので、自分では何も準備しませんでした。とても面白いです。

□ (読む) 4 頁下段 2 行目～3 行目

M 「たぶんアラーティのお時間だろう。お部屋に入ってもよいだろうか。」

(解説)

この本文の『アラーティ』という言葉は間違っていますね。個人的な部屋でアラーティはしないので、アラーティではありません。原本では shandya サンディヤー、英語訳では evening worship、日本語で『夕拝』だと OK です。

サンディヤーについて

①サンディヤーのやり方

サンディヤーという言葉の説明をします。ブラーミン (シュリー・ラーマクリシュナもブラーミンでしたね)、お坊さんは朝と夕にサンディヤーという礼拝をしますね。瞑想、ジャパ、ガーヤットリー・マントラを唱えます。昼も加えて 3 回のこともあります。

(☞第 23 回勉強会)

ガヤガンガーの唄を歌われる。』』

これはとても有名な歌です。この中で、ブラーミンは3回ガーヤットリ・マントラを唱えます。坐ってガンジス河を想って、目を閉じてガーヤットリ・マントラを唱えます。簡単な儀式です。目的は身体を純粹にするためです。

②サンディヤーの意味

サンディヤーには二つの意味があります。本来の意味は『夕方』です。もうひとつの意味は、『ガーヤットリ・マントラを唱える』です。このときは夕方でしたので、Mさんはたぶん二つの意味でサンディヤーを使いました。

□ (読む) 4 頁下段 2 行目～3 行目

お部屋に入ってもよいだろうか。われわれがお目にかかりたいと申し上げてくれますか」

(解説)

Mさんは西洋式の教育を受けていたので許可をもらって入ったほうがいい、とたぶん考えました。一度部屋の外に出たので、もし大丈夫だったら入ります。それが普通のエチケットでしょ。自分は新しく来た者ですから、許可をもらって入りたい。

インドの伝統ではお坊さんの部屋はいつでもオープンなので誰でも入れます。それがお坊さんの部屋の特徴です。しかしプリンデーは「いらないいらない、どうぞ入ってください。問題ありません」と言いました。そしてMさんとシドゥは中に入った。

□ (読む) 4 頁 6 行目～10 行目

部屋に入ると、シュリー・ラーマクリシュナは一人、木の寝椅子にすわっておられた。香がたかれたばかりで、扉は閉まっていた。入ると M は手を合わせて師にあいさつをした。それから師の命によって彼とシドゥは床にすわった。シュリー・ラーマクリシュナは彼らにおたずねになった、「どこに住んでいるのかね」「仕事は？」

(解説)

Mさんがプラナームをしなかった理由

Mさんは手を合わせて師に挨拶をしました。ふつうインドでお坊さんにごあいさつをするときはプラナームをしますね。お坊さんの足先にタッチをします。しかしMさんは二つの理由でそれをしませんでした。

① ひとつ目の理由は、Mさんが西洋式の教育を受けていたことです。

②もうひとつの理由は、ドッキネッショルがベンガル地方にあったからです。

その当時、ベンガル地方ではお坊さんがあまりいなかった。ほとんどの坊さんは北インド、ヒマラヤ、ベナレス、カンカル(ハリドワールの聖地のひとつ)、リシケシなどにいました。ドッキネッショルにはたくさんのお坊さんが来ましたが、ほとんどは別の場所からです。例えばトター・プリーは北西パンジャブの方でした。コルカタにはあまりお坊さんがいなかった。ですのでサンニャーシー、出家僧をあまり見たことがなかった。ヴェーダーンタのお坊さんをあまり知らなかった。Mさんだけでなく、コルカタのほとんどの人がそうでした。(注1)

それでMさんはタッチせずに手を合わせました。

□ (読む) 4頁下段8行目～14行目

それから師の命によって彼とシドゥは床にすわった。シュリー・ラーマクリシュナは彼らにおたずねになった、「どこに住んでいるのかね」「仕事は?」「ボラノゴルには何の用できたの?」Mはそれらの質問に答えたが、ときどき師が忘我の状態にお入りになるらしいことに気づいた。後にこの状態がバーヴァ、法悦状態と呼ばれるものであることを知った。

(解説)

福音がこんなに面白い理由

①Mさんは分からなくてもメモした

本当のお坊さんがどのような様子なのか

お坊さんのやり方とはどういうものか

霊的なムードとはどんなものか

Mさんはこれらのことを本では読んでいたが、何も知らなかった。

しかしMさんは全然知らなくても、メモを取って日記に書きました。シュリー・ラーマクリシュナがこの時どのようなムードであったのか、全く分かりませんでした。日記に残した。

バーヴァ、マハーバーヴァ、サマーディ、(『福音』用語解説)

バイヤダシャ、アルダバイヤダシャ、アンタルダシャ(注2)、何が本当のサマーディか。シュリー・ラーマクリシュナはこれらのことを何回も何回も説明しましたが、それだけではなく、シュリー・ラーマクリシュナの中からいろいろな霊的なムードが自然に生まれました。

② Mさんは何度も霊的なことを見て聞いて、自分でも実践して経験し理解した

Mさんは何回も説明を聞いて、さまざまな霊的なムードを見て、ずっと後にそれらの意味が分かりました。シュリー・ラーマクリシュナの身体がなくなっただけで、福音は書かれましたね。Mさんは自分でも実践して、全部はつきりと経験しました。その経験と理解をもって福音を書いたので、福音はこんなにも面白いのです。

□ (読む) 4頁下段 14行目～19行目

それは、釣りざおを持ってすわっている釣りびとの状態のようなものである。魚がきて餌をつつく。すると浮きが動きはじめる。釣り人は緊張する。彼はさおを握り、浮きをじっと見つめる。誰にも話しかけたりはしないだろう。このようなのがシュリー・ラーマクリシュナの心の状態であった。後にMは、シュリー・ラーマクリシュナが日暮れになるとしばしばこの状態に入れ、ときには外界の意識をまったく失われることを知った。

(解説)

Mさんはシュリー・ラーマクリシュナがバーヴァに入った時の状態をこのような例を用いて表現しました。Mさんは福音を書くときにこの例を使いましたが、初めてドッキネッシュヨルを訪問したときにはこのような理解はありませんでした。

(『福音』勉強会第24回 以上)

注1 (編者注) (DVD ヴィヴェーカーナンダ バイ ヴィヴェーカーナンダより)

「コルカタはインドの中でも最も重要な学園都市です。毎年何百人もの懐疑主義者と物質主義者を送り出してきました」

注2 第4回勉強会より

ひとつは「バイヤダシャ (Bāhyadashā)。バーヤが「外」、ダシャが「状態」という意。この状態では、信者は神様を礼拝し、神様を思い泣き、歌い、踊ります。しかし外の環境にも気づきがあり、理解できています。

次に半分外、半分中の状態。「アルダバイヤダシャ (Ardha-Bāhyadashā)」。アルダとは「半分」という意味。外への意識がだんだん中に入ってきて、神様への気づきがより深くなった状態。この状態では、信者は歌は歌えない。しかし踊ることはできます。

もっと深くなると「アンタルダシャ (Antardashā)」。すべてが内側に入ります。アンタルは「中」。中に入っている状態。歌はもちろん踊りもできなくなる。信者は物質のようになります。なぜ？ ぜんぶ中に入りましたから。すべて神様。信者はその状態。